特別記事

依水園のおひなさま

東大寺南大門の西方に位置する日本庭園・依水園を整備した数寄者・關藤次郎。彼が孫の初節句のために誂えた雛人形は、男女の公家が「曲水の宴」を催す情景を表した珍しいもの。圓能斎の門下として、茶の湯にも熱心であった關藤次郎が愛孫のために、京の老舗・丸平大木人形店に制作を依頼した、精巧・優美な人形飾りを紹介する。

140頁から、「依水園のひなまつり」で展示予定の雛人形「曲水の宴」の解説を掲載。

特別記事

依水園のおひなさま「曲水の宴」について

公益財団法人名勝依水園・寧楽美術館学芸参与
稲畑ルミ子

はじめに

三月三日雛祭の雛人形としては、束帯・十二単という公家の正装をした男女一対の内裏雛や雛壇に人形・調度や供え物を飾った形のものが多く見られますが、依水園は公家の男女が曲水の宴を催す情景を表現した珍しい雛人形を所蔵しています。

東大寺南大門の西方に位置する日本庭園の依水園は、奈良の実業家關藤次郎（一八六四～一九三一）が明治期に庭園を備えた別邸を建築したことに始まります。藤次郎の没後、現在の大和郡山出身の実業家中村準策（一八七六～一九五三）が自身の蒐集した美術品を公開する場として昭和十四年（一九三九）に藤次郎のご子息から依水園を取得し、財団法人寧楽美術館を設立（昭和十五年認可）、戦争により準備が滞りましたが、昭和三十三年に庭園と美術品の公開が始まり、美術館の建物は昭和四十四年に完成しました。

關藤次郎

雛人形「曲水の宴」は、依水園を創始した藤次郎が明治四十年（一九〇七）に初節句を祝った外孫の市田ちか子（對龍山荘旧主・市田弥一郎の内孫）の為に誂えた人形です。長く市田家に伝えられてきましたが、平成三十年（二〇一八）にちか子の次女・山崎博子様がゆかりの深い当園へご寄贈下さいました。人形の老舗である京都の丸平大木人形店の制作に成り、精巧・優美な出来映えは明治期の人形制作の高い水準を示しています。一昨年（二〇一九）・昨年には雛祭に合わせ、同時に寄贈を受けた稚児雛・市松人形と共に展示しました。今年も二月十日から三月三日までの展示を予定しております。今後のご鑑賞の一助となりますよう、全体像と個々の人形を紹介いたします。

曲水の宴という主題について

三月三日の節句は「上巳の節句」と呼ばれます。上巳とは月の上旬の巳の日のことで、古代中国では三月の上巳に水辺で身を清めて不吉を祓う風習がありましたが、やがてこの禊を三月三日に行うようになりました。また、同じ日に曲水（曲がりながら流れる水）に盃を流し、盃の酒を飲みながら詩を詠む「曲水の宴」を行うようになりました。

上巳に曲水の宴を行う習慣は早く日本へ伝わりました。『続日本紀』には奈良時代の神亀五年（七二八）三月己亥（三日）に聖武天皇が池の塘で朝臣をもてなし、また文人に曲水の詩を詠ませたことが記されています。その後も平安時代の朝廷に受け継がれましたが、鎌倉・室町時代に廃れたとされています。

三月三日に雛遊びを行うようになったのは江戸時代のこととされています。男女一対や壇飾りの雛人形が発達しましたが、藤次郎は孫娘の雛人形として王朝時代の上巳の行事である曲水の宴の形を選びました。藤次郎は、漢学を学び和歌や裏千家流茶道に打ち込むなど文化人として知られています。雛人形「曲水の宴」からも、日本の古い行事に対する藤次郎の関心が窺われます。

全体像と個々の人形について

少し前置きが長くなりましたが、ここからは雛人形「曲水の宴」の全体像と個々の人形を紹介いたします。

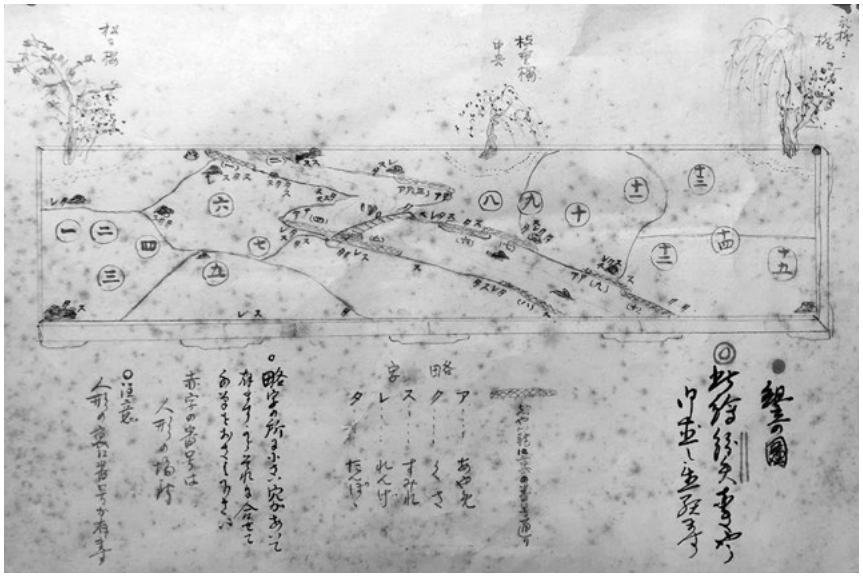
横幅三百六十センチメートル余り、奥行七十センチメートル余りの水平の台座の中央に曲水を表し、一方の岸（人形に向かって右側）に八体、対岸に七体、計十五体の人形を配して、公家の男女による曲水の宴の情景を表現しています。

向かって右の岸の水辺に坐る三人の男女が行事の中心と考えられます。中央の男性は直衣を着て冠を被り、短冊を手にしています。白地に小葵文を織り出した生地は天皇・東宮の直衣に用いられる格式の高いものです。女性は朱地に向い鶴などの菱形文を織り出した小袿と緋袴を着け、頭の正面に金属製髪飾りの釵子を飾り、料紙を手にしています。二人の前には料紙箱・硯箱が載った文机が置かれており、水辺で詩歌を詠む姿です。中央の男性の右隣には、縹色の衣冠を着て中啓（閉じた時に先端が広がる形の扇）を持つ若い公達が坐っています。三人の背後には笙を吹く小袿姿の女性、若い公達の右隣には鞨鼓を打つ振袖・袴姿の稚児がおり、楽の音が聞こえてくるようです。

後方には若い公達と姫君の立ち姿があります。公達は立涌に菊文様を織り出した小直衣を着て立烏帽子を被り、中啓を手にしています。色白の細面に高眉（眉を剃ってから高い位置に描いた眉）の高貴な顔立ちです。姫君は朱地に小葵文の小袿と緋袴を着け、檜扇を持っています。格式の高い装束や、水辺の詠歌・奏楽からやや距離を置いていることなどから、男女一対の雛人形に動きを与え、場に組み入れたとも考えられます。桃の枝を持つ稚児が近くに立っています。

対岸には、楽器を演奏する男女と酒器を持つ女官が配されています。水辺の狩衣姿の男性は琵琶、小袿を着た女性二人は龍笛と箏、女官二人は篳篥と楽太鼓を奏しています。背後に立つ女官二人の一方は盃を載せた三方、他方は酒を注ぐ長柄の銚子を持っています。女官・稚児の小袖・振袖には金糸や色糸で梅・桜・

右上／箏を弾く女性と三方や長柄銚子を持ち、篳篥を吹く女官　右中／琵琶を弾く男性　右下／衣冠の公達
左上から／笙を吹く女性　龍笛を吹く女性　三方を持つ女官　桃の枝を持つ稚児



「曲水の宴」組立の図

關藤次郎筆　雛人形箱書

鶴・尾長鳥などの文様が刺繍されており、晴れやかです。

人形の顔立ちはどれも上品で優しく、しかもそれぞれの特徴が表されています。男性の髭の有無、肌の色合い、眉の形などにより年齢や立場の違いが示され、最も高齢の女性には顔の皺や白髪も表現されています。稚児二人は頬のふっくらした子供らしい顔立ちをしています。人形の頭部は、名工として知られる京都の十二世面屋庄次郎の作です。

宴の場の造りにも注目されます。背後に立つ柳と桃（向かって右）・枝垂桜（中央）・松と桜（左）や水辺に咲く菫・蒲公英・蓮華・菖蒲・草は精巧な造花で、京都の雲上流造花の村岡松華堂製です。竹を編んで砕石を詰めた護岸用の蛇籠も流れの際に置かれています。木の幹や幹に生えた苔、蛇籠の石には実物が用いられており、写実的な一面が現れています。

この雛人形を組み立てる為の指示書である「組立の図」が付属しており、各人形・蛇籠を設置する位置の他、どの種類の草花をどこへ差し込むかまで細かく指示されています。

人形を収納する箱の蓋には、關藤次郎の筆跡で「直衣着用公家」など収納すべき人形の種類と共に「ちか子」の名が記されており、孫ちか子に対する藤次郎の愛情が感じられます。

なお、収納箱の内側に貼られている丸平大木人形店の商標は、丸平が明治二十三年の第三回内国勧業博覧会で有功賞を受賞したことに基づく商標に丸平の電話番号が加えられたもので、明治三十年から四十一年に使用されたとされます。

おわりに

依水園のおひなさま「曲水の宴」をご紹介しました。この人形の展示期間に依水園へお越しになり、実際にご鑑賞いただければ嬉しく存じます。

依水園のひなまつり

会期	**2月10日（水）～3月3日（水）**
開園時間	午前9時30分～午後4時30分（入園受付は午後4時まで）
休園日	火曜日（但し、2/23〈火・祝〉は開園、翌2/24〈水〉は休園）
会場	名勝依水園　主屋内（寧楽美術館は休館中） 奈良市水門町74　☎0742-25-0781
観覧料	一般1,200円／高校生・大学生500円／小・中学生300円 （庭園を含む）

● 新型コロナウイルスの感染状況によっては変更の可能性があります。
主屋へのご入場の際、人数制限を行わせていただきます。